

# 105 経腔超音波法による発見卵巣腫瘍の経過について

香川医大、香川県立がん検診センター\*  
黒瀬高明、五十嵐達也、大野正文、半藤 保、  
塩田敦子\*

[目的]経腔超音波法による卵巣癌検診のハイリスクグループの設定のために、発見卵巣腫瘍の経過についてその大きさや発生年齢、月経周期による差異との関連を検討した。[方法]子宮癌検診で受診した延べ26306名、15287例を対象とし、全例に経腔超音波法による卵巣スクリーニング検査を行い、リアルタイムにコンピューター登録を行った。嚢腫の最大径を測定し、30mm以上を卵巣腫大例とした。個々の経過を観察し存続群、発生群、消失群等に分類し、腫瘍径・月経周期・年齢層別に解析した。[成績]卵巣癌は10例(0.065%)発見された。30mm以上の卵巣腫大例は955例(6.2%)あり、そのうち手術例は105例あった。大きさ別では50mm以上は233例(1.5%)で消失率、発生率とも有意の低下をみた。年齢を45才未満(P)、45才以上55才未満(M)、55才以上(E)の3群に分けて検討すると、総数はそれぞれ 502, 353, 100例あり、消失例は176(35%), 149(42%), 10(10%) で存続例は139(28%), 105(30%), 48(48%)となり、また発生例は124(24%), 127(36%), 18(18%)であった。さらに発見時の月経周期を増殖期、分泌期、延長期に分けて解析すると、P群, M群の順に 30.5%, 57.6%, 11.8% : 27.4%, 37.6%, 35.0%となった。[結論]更年期には卵巣嚢腫の発生率、消失率とも高いが、その多くは50mm以内の腫大例であり、月経周期の延長例の頻度が高かった。閉経後は発見率は低いものの、大きな腫瘍例が多く、消失率も極めて低い。月経の有無による卵巣嚢腫の発生機転の違いが示唆され、殊に閉経後は経腔超音波法による卵巣癌検診が有用と考えられた。

# 106 重量にもとづく卵巣腫瘍の組織別分類および合併症に関する統計学的研究

大阪市立総合医療センター、同立住吉市民病院\*  
李 東満、三橋玉枝、周藤雄二、津田浩史、中本  
収、川端政実、松尾重樹、山本久美夫、松本雅彦、  
日高敦夫、浜田和孝\*

[目的]卵巣腫瘍はそのサイズにおいて大きな変位を示す。卵巣腫瘍を重量別に区分し各区分毎に卵巣腫瘍の組織別分類および合併症等の統計学的検討を試み、その補助診断並びに術後合併症防止に利することを目的とした。[方法]①手術症例の卵巣腫瘍192例を対象とした。②腫瘍重量区分を9段階に分け各区分で年齢、組織型、staging, 症状、予後、術後合併症、手術前後の血圧変化等について検討した。[結果]①100g以下ではfollicular cyst, endometriosis cystが約6割を、②100gから300gではdermoid cyst, endometriosis cystが約7割を、③300gから400gではmucinous cystadenoma, dermoid cystが約5割を占めた。④400g以上では重量の増加に従ってmucinous cystadenomaの割合が増加した。また悪性の頻度は30%以上に増加し、その頻度は重量の増加につれて最大50%まで増加した(400g以下では6%以下)。⑤400g以下では平均年齢は39歳、400g以上では平均年齢50歳であった。⑥大きい卵巣腫瘍では術前に比し術後血圧の低下傾向が認められた。⑦15kg以上の巨大卵巣腫瘍2症例において術後合併症として呼吸不全を認め、1例は呼吸循環不全で死亡した。[結論]①卵巣腫瘍はその重量分布の各区分毎に特定の組織型の頻度が高かった。②400g以上の卵巣腫瘍で、悪性は30%以上と高率であり、平均年齢も明らかに高齢であった。③重い卵巣腫瘍では術後血圧の低下がみられ、とくに15kgを越える巨大卵巣腫瘍の術後には呼吸循環不全の発症に留意せねばならない。